

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	3290700057		
法人名	株式会社 ひょうま		
事業所名	グループホーム ひなたぼっこ・相生②		
所在地	島根県浜田市相生町1445番地2		
自己評価作成日	2022年 8月 31日	評価結果市町村受理日	令和4年11月24日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	株式会社 コスモブレイン		
所在地	島根県松江市上乃木7丁目9番16号		
訪問調査日	2022年 9月 20日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

<p>1、日々変わる入居者一人ひとりの状況を見ながら、常に職員一同で考えながら必要な支援をしている。</p> <p>2、入居者各々が、できることをすることで、毎日が張りのある生活になるように支援している。</p> <p>3、コロナ禍にあって、面会制限や外出制限があるが少しでもここでの生活が楽しくなるように工夫している。</p> <p>4、若い人材が育つように、職員全員で見守っている。</p>

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

<p>住宅地の中の施設で幹線道路から少し入っている為交通量も限られ静かな環境にある。ここ数年はコロナ禍で外部との交流は断たれ、面会もままならず刺激のない中、敬老会では職員が芸を披露するなど入所者の楽しみに繋がるよう取り組んでいる。コロナウィルス感染症の感染予防対策を続けながら、以前にも増して業務が煩雑とする中、職員間のチームワークは良く何事も一致団結して取り組まれている。</p> <p>地域の中の施設として時間をかけて築いてきた関係もコロナ禍で中断。それに加え住民の高齢化もあり、今後に於いても災害時等での協力も望みにくい状況だが、この4月以降は実習生の受け入れや研修を再開するなど明るい動きも出てきている。多くの課題がある中でも2つのユニットの協力でコロナウィルスの感染等を乗り切った経験を基に、今後も前向きに取り組んでいただきたい。</p>
--

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

〔セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。〕

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	施設内で、安らぎと喜びのある日をその人なりに過ごしていただけるように支援している。事業所の理念を日々のケアの中で思い返し、実践に繋げている。	職員、入所者共に入れ替わりが無く安定している反面、経験年数が長くなったことによる弊害もある。ケアの場面で意識の違いを感じることもある為、管理者はその都度理念に照らしながら話すをするようにしている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナウイルス感染症が流行する前は、地域の行事にはできるだけ参加していたので、ご近所の方々とは職員や入居者様も顔なじみになっている。散歩やひなたぼっこをしながら、地域の方々との交流を図っている。	地域行事の殆どが中止になり、交流の機会は途絶えているが、近隣の散歩中には声かけがあったり、挨拶をしたり関係の継続に努めている。今年度になり実習生の受け入れを再開し徐々に外部との関わりが増えてきている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	ご家族や知人の認知症状についての相談や質問を受け、事業者での実践を踏まえて、認知症の方の理解や支援の方法をお伝えしている。また、今年は高校生の実習を受け入れることができた。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	入居者やサービスの内容を伝え、意見を伺いそれをサービスの向上に努めている。	コロナウイルス感染者が少ない時期は参集にて、多い時は文書開催としている。入所者の身体状況や行事、研修、事故報告。コロナウイルス感染症の対応などを伝え意見を得るようにしている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	市担当者窓口に対し、事業所の実情やケアサービスの取り組みや困りごとを伝えるように努めている。	市が地域包括業務を社協に委託した為、社協から運営推進会議への参加があり、専門的立場からの意見を得ている。行政とは書類の提出などで関わる場面があり、いい関係性が築けている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	毎月開催しているスタッフ会議で、具体的に話し合っている。また、三か月に一度の身体拘束適正化委員会の研修では、正しい知識と理解を深め身体拘束をしないケアを実践している。	帰宅願望の強い方がいるが、一緒に施設周辺を散歩するなど落ち着けるよう対応している。定期の委員会の開催に加え、今年度、本社での研修も再開。年2回の個人面談時には身体拘束を含めた虐待防止のアンケートを実施するなど意識を高めている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	研修には必ず参加し、伝達研修を行っている。定例会議において、毎月話し合い、不適切ケアや虐待に繋がるようなケアがないかを検討し、防止に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	新入居者を迎えるにあたって、日常生活自立支援事業や成年後見制度について勉強し、活用できるものがないかを検討している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居時の契約の締結時はホーム長と担当職員が立ち会い、また、改定などの際はホーム長や担当職員が十分な説明をし、ご家族や入居者の意見を伺いながら、理解・納得を得るようにしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	入居時には内部・外部の相談窓口の説明を行い、面会時やサービス担当者会議では必ず、意見や要望などを聞き、反映できるよう努めている。	コロナウイルス感染症の感染拡大前までは、年1回の家族会を開催していたが中止。家族関係者には入所者の日々の様子を伝える便りを写真入りで作成し送っている。年賀状も職員と一緒に書いて送るなど意見を得る機会としている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	日々の業務の中で、職員の意見や提案を常に聞き、管理者は本社に伝えることで反映できている。定期的に個人面談を実施し、いろいろな思いや意見を聴くようにしている。	以前から年2回の個人面談を続けている。虐待のアンケートも行い、個人目標の作成に繋げている。管理者は不得意なことを個人目標に掲げたり、資格取得への気持ちや将来設計等含めて話をするようにしている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	個々の事情に合わせた勤務体制を整えたり、介護福祉士や介護支援専門員などの資格取得に向けての支援や取り組みを行っている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	職員一人ひとりに合わせ、内部・外部研修に参加できるように配慮している。また、研修に参加した職員は他の職員に伝えることで皆が研修内容を理解し習得できるようにしている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	他のグループホームや小規模多機能事業所の情報を会議などで伝達し、サービスの質の向上に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前の面談時には、ご本人の思いを十分に聞き、ホームとしてできる範囲で話し合いを持ち、入居後の生活の中で持ち上がった問題や不安には家族を交えて対応している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居に至るまでの経過等の傾聴に努め、より良い信頼関係の構築に努めている。特に金銭面での不安や生活面での要望にはしっかり耳を傾け、より良い関係づくりに努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	ご本人やご家族、また、担当ケアマネから本人や家族の状態や状況を正しく把握し、適している施設やサービスを説明し、案内するようにしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	職員は、生活する上でのご本人のできる部分を大切にし、作業を一緒に行うことで役割を持ち、生きがいを感じていただけるようにしている。常にできる部分は尊重し、教えてもらうこともある。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	ホームでの生活ぶりや日々の出来事を細かく伝え、協力していただけることはお願いをしながら、共に本人を支えていけるような関係を築くように努めている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	親戚や友人と電話でお話をしてもらったり、写真を居室に置くなどの支援をしている。	以前は馴染みのスーパーで知り合いに出会う機会があったり、友人の訪問もあったが高齢のため話しくなくなったり機会は少ない。絵手紙での行き来のある方にはお礼の電話を入れるなど、できるだけ接点を持つようにしている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	入居者同士の日常の中での会話や動作の中から、関係性を把握し席の配置や、作業のお手伝いなどで関りが持てるように配慮している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	亡くなられたり、入院され退居になった後でも、家族からの相談や支援を行っている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	一人ひとりの思いや希望を押し量りながら日々関わっている。特に認知症からくる不穏状態など困難な場合は本人本位に検討し、家族や主治医の意見を聴きながら対応している。	外に出たいなど思いを言う方には対応しやすいが、思いを言わない方もあり、ご家族へ電話で聞く場合もある。以前は好きでできていたことも、興味を示さなくなることもあるので、今できることを見つけ計画作成に繋げている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居前には実地調査を行い、生活感を共有するようにしている。また、ケアマネージャーからできるだけ多くの情報を収集して、入居後も電話で聴くなどしてご家族やケアマネとの関係を維持している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	一人ひとりの様子を細かく観察し、記録することで心身状態や現状の把握に努めている。特に有する力は日によっても、人それぞれ違うので把握に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	毎月のアセスメントや三か月毎のモニタリングを担当職員が行い、それを基に往診時や医療連携時に主治医や訪看、他のスタッフの意見も取り入れ現状に即した介護計画を作成している。	日頃の変化を良く見ている担当者がアセスメント、モニタリングを記入している。コロナ禍で対面での担当者会議はできていないが、電話等で意見を聞き職員で開催し、了解を得るようにしている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の個人記録にケアの実践や結果、気づきや工夫が書かれており、それを出勤時に必ず読むことで情報の共有ができています。また、定例のスタッフ会議で意見を出し合い介護計画の見直しに活かしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	柔軟な支援や臨機応変にサービスが提供できるように、個々のニーズに応じて対応している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	コロナ禍でなかなか難しい状況にあるが、認知症カフェが再開したら行けるように支援したいと考えている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	ご本人・ご家族の希望される医療機関で受診・往診を受け、適切な医療を受ける体制ができている。入居と同時に殆どの方が事業所協力医に変更されているが、皮膚科や眼科医は職員が支援し、受診している。	かかりつけ医を継続することも、事業所の協力医に変更することもできるようになっている。協力医には月に2回の往診を受けており、夜間緊急時等にも指示が得られるようになっている。他の科には職員が付き添い受診を続けている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	日々の情報や気づき、また、疑問点をノートに記載し、訪看来所時に相談している。急変時には診ていただき適切なアドバイスを受け、受診に繋げている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	日頃から地域連携室の相談員とは入居者の紹介などで連絡を取り合っており、入院当初から状態の把握に努め、安心して治療に励んでもらい、早期の退院に繋げている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化に伴う終末期について、家族の思いに添えるように、主治医や家族と話し合いを重ねている。	ご本人、ご家族関係者の希望があり、協力医とも相談してここでの対応が可能と判断した場合は看取りを行うこととしており、過去にも経験があり、今後も同じように取り組むこととしている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変時の対応についての内部研修を定期的に行い、急変・事故発生時に対応できるようにしている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	運営推進会議で課題として話し合ったり、施設で行う昼夜想定での消火・避難訓練には近所の住民にも参加してもらい、地域との協力体制を構築している。	裏に小高い山があり土砂崩れのイエローゾーンになっている為、火災・自然災害等いろいろな場面を想定して訓練を続けている。近隣も高齢化が進み、地域の協力を得ることは難しく職員のみで取り組むように考えている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	本人が頑張っていることや努力してこられたことを褒める言葉にし会話している。また、プライバシー保護のため、トイレ内には個人個人のタオルを用意している。	コロナ禍で外部との関わりがない分、気が緩んで緊張感に欠けるような場面があるため、その際には、話をするようにしている。本社での接遇研修も始まったので、スタッフ会議を行い周知するようにしている。	幅広い内容の研修をすることで個々のレベルアップに繋げていただきたい。
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	週に一回はおやつや飲み物の選択制を取り入れて自己決定できるように支援している。また、ゆっくりと昔話を聞いたり、季節を感じていただけるような会話を心がけている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	口腔ケアやトイレ誘導、また食事や入浴などに拒否があっても、強制するのではなく、少し時間を空けて再び、声かけを行い、ご本人のペースで生活できるように寄り添った支援をしている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	毎日の生活の中でも、ご本人の要望を聞き日常着と一緒に選んだりしている。また、理美容の希望には添えるようにしている。行事の日には、おしゃれを楽しんでいただけるように支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食器なども種々取り揃えて日々の気分が変わるように気を付けている。野菜の皮むき等の下準備から炒めたり等の調理、また、盛り付けや食器洗い等、いろいろな作業を一緒に行っている。	職員が買い物に行き、その日の担当者がメニューを決め3食作っている。調理の下準備や盛り付けなどできる作業を職員と一緒にするようにし、料理の音や匂いなどを感じてもらいながら食事ができるようにしている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	定期的な血液検査を基に、主治医、看護師と相談している。また、嫌いな食材については、できる限り代替えを提供し、飲み物は、コーヒーや紅茶、又はジュース等、飽きが来ないように工夫している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、歯磨きの声かけを行い、確認をし、個々の状態に応じて、できない部分を支援している。また、歯科衛生士の指導の下、ブラッシング等の支援を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	日々の記録を基に個々の排泄パターンを知り、声かけや誘導を行っている。可能な限り布のパンツを使用してもらい、トイレでの排泄を支援している。	個々の排泄パターンに合わせて対応しており、特に感染症対策に注意している。紙パンツ・パット等も施設でまとめて少しでも安く購入できるように、家族と相談しながら決めるようにしている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	自然排便を促すために、十分な食事量と水分量を接種できるように声かけや手作りゼリーで対応している。また、個々に応じ、牛乳を提供したり、まめなくん体操などの運動を一緒に行っている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	ご本人の意向に沿って、随時、変更を行っている。また、急な体調不良時や不穏時にも同様に、日を変えたり、時間の調整を行っている。	普通家庭浴槽の為、重度で中に入れられない場合はシャワー浴や清拭で対応している。週2～3回のペースで入浴できるように組んでいる。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々の状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	起床時間は決めずに、各々が気持ちよく起きて来られるように支援している。また、腰痛の訴えをされる方や、眠そうな方には、居室で横になっていただいている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬の情報は常に分かるようにノートに記載し、また服薬の支援や受診、往診時の対応はできるだけ多くの職員が関わるようにして、理解を深めている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	各々の得意なことやできることをお願いして、毎日の生活の中でご本人の能力を発揮していただいている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ禍の影響で外出が難しくなっているが、収束したら以前のように一人ひとりの気持ちに沿った支援をしたい。天気の良い日には、近所の散歩やひなたぼっこに努めている。	コロナ禍で外出の機会はかなり減っているが、近隣を散歩したり少人数でドライブに行くことで気分転換している。玄関前にプランターでトマトやキュウリ、レタスなどを作っており、成長を見たり収穫を楽しんだり、外気に触れる機会としている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	入居時にお金を持参される方はほとんどいないが、中には持っている方もいる。現在は、コロナ禍で買い物に出かけ使う機会を持つことはできていないが、ホームで立て替えて購入している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	ご本人・ご家族が望むときには、電話や手紙やリモート面会の支援をしている。週に3～4回、ご家族からの電話を楽しみにしている入居者もいる。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	ホールや廊下の壁、玄関等には入居者と一緒に作成した飾り付けに工夫を凝らし季節感を取り入れている。玄関先には、季節の野菜やお花づくりをして季節感を味わえるように工夫している。	住宅地の中で草木等はあまり見えず自然を感じにくい為、玄関先やデイルームに季節の花を飾るようにしている。畳の部分があるも利用は少ない。エアコンに冬場は床暖房も使用し、感染症予防の為換気には特に気を配っている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	玄関先にはいつでも座れるようベンチを配置し、ホールにはソファや椅子を置いて気の合った利用者同士でテレビを観たり、一人の時間を持つことができるようようにして、自由に過ごしていただいている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	ご本人が快適と感じられる室温には十分に気を付け、ご家族に相談し、家にある使い慣れたものや好みのものを持ってきていただいたり、こちらで準備するようになっている。	思い入れのある物の持ち込みを薦めているが、大きめのクローゼットがあり収納ができ、物があることで落ち着かない場合もある。畳の部屋もあり状態に合わせて布団にするなど対応することとしている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	居室のベッドからの立ち上がり時に滑り止め用のマットを張り付けたり、失禁による衣類を入れるバケツを置いたり、一人ひとりの状況に応じて工夫している。		